



Title	中岡成文教授 研究業績等一覧
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2014, 45, p. 6-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51524
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中岡成文教授 研究業績等一覧

【著書】

- | | | |
|------------------------|-----------|--------------------|
| 1. ハーバーマス——コミュニケーション行為 | 1996年12月 | 講談社 308p. |
| 2. 私と出会うための西田幾多郎 | 1999年10月 | 出窓社 197p. |
| 3. 哈貝馬ス——交往行為（中国語） | 2001年 8 月 | 王屏訳 河北教育出版社 262p. |
| 4. 臨床的理性批判 | 2001年10月 | 岩波書店 203p. |
| 5. パラドックスの扉（双書・哲学塾） | 2007年12月 | 岩波書店 148p. |
| 6. 試練と成熟——自己変容の哲学 | 2012年 4 月 | 大阪大学出版会 iv + 215p. |

【編著】

- | | | |
|-----------------------------------|-----------|--|
| 1. ヘーゲル哲学の現在 | 1988年12月 | 世界思想社（共編） |
| 2. 地域のロゴス | 1993年 5 月 | 世界思想社（共編）291p. |
| 3. システムと共同性——新しい倫理の問題圏 | 1994年11月 | 昭和堂（共編）300p. |
| 4. 西洋哲学史〔近代編〕
——科学の形成と近代思想の展開 | 1995年 4 月 | ミネルヴァ書房（共編） |
| 5. 知のパラドックス
（「岩波新・哲学講義」第3巻） | 1998年 1 月 | 岩波書店（責任編集）219p. |
| 6. 戦争責任と「われわれ」
——「歴史主体」論争」をめぐる | 1999年 6 月 | （倫理学のフロンティア VI）
ナカニシヤ出版（共編）254p. |
| 7. 臨床と対話
——マネジできないもののマネジメント | 2003年12月 | 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科
2002・2003 年度報告書第7巻（責任編集）267p. |
| 8. 生命（「岩波応用倫理学講義」第1巻） | 2004年 7 月 | 岩波書店（責任編集）267p. |
| 9. 臨床と対話 | 2007年 1 月 | 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科・コミュニケーションデザイン・センター
2004-2006 年度研究報告書第8巻（責任編集）246p. |
| 10. 岐路に立つ人文学 | 2007年 1 月 | 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科・コミュニケーションデザイン・センター
2004-2006 年度研究報告書第1巻（編集）235p. |
| 11. フロイト全集第8巻
「機知——その無意識との関係」 | 2008年 2 月 | 中岡成文他訳、岩波書店（責任編集）329p. |
| 12. ドキュメント臨床哲学
（シリーズ臨床哲学 第1巻） | 2010年 9 月 | 鷺田清一監修、本間直樹と共編、
大阪大学出版会 282p. |

【論文】

- | | | |
|----------------------------------|-----------|-----------------------|
| 1. 若きヘーゲルの書きものにおける人格・静安・記憶等のモチーフ | 1976年 4 月 | 京都大学哲学論叢刊行会編『哲学論叢』第3号 |
|----------------------------------|-----------|-----------------------|

2. 解釈学と精神分析	1978年 5月	日本哲学会編『哲学』第 28 号
3. 解釈学と弁証法	1979年 5月	『思想』第 659 号
4. 解釈学的循環と弁証法的発展	1980年 2月	『理想』第 561 号
5. ヘーゲルにおける絶対性のアスペクトとしての深処	1980年12月	立命館大学人文学会編『立命館文学』第 424・425・426 合併号
6. 看護論についての哲学的ノート	1980年12月	『看護教育』第 21 巻第 12 号
7. 近代市民社会とそのイデオロギーに対する批判 ——ヘーゲル・フランクフルト草稿を中心として	1981年 1月	福岡女子大学文学部紀要『文芸と思想』第 45 号
8. 否定性と規範 ——ヘーゲル哲学における実践的なもの	1981年 6月	『思想』第 684 号
9. 西田哲学における＜弁証法的論理＞	1984年11月	『思想』第 725 号
10. Zur Differenzfrage. H.Tanabes Philosophie des Absoluten Nichts	1985年 4月	Philosophisches Jahrbuch, Bd.92, Freiburg/München, pp.124-125
11. 対話と実践	1985年 9月	『新岩波講座哲学』第 10 巻
12. Das Nichtidentische und das Nichts. Aspekte des Negativitätsdenkens in Ost und West	1985年12月	Wiener Jahrbuch für Philosophie, Bd.XVII, Wien, pp.109-121
13. 行為とコミュニケーションにおけるいくつかの＜差異＞について	1986年 5月	日本哲学会編『哲学』第 36 号
14. 解釈学	1988年 2月	竹市明弘他編『哲学とは何か——その歴史と可能性』、勁草書房
15. 意味と主体のポジション	1988年 4月	『理想』第 638 号
16. 討議倫理学ノート	1988年10月	日本倫理学会論集 23『倫理学とは何か』、慶應通信
17. 意識・経験・自己意識	1988年12月	加藤尚武他編『ヘーゲル哲学の現在』、世界思想社（編著 1）
18. コミュニケーションの戦略	1990年 6月	現代哲学の冒険 14『浮遊する意味』、岩波書店、pp.75-149
19. 精神のエロス	1990年 9月	原田平作他編『性のポリフォニー』、世界思想社
20. ポスト構造主義の冒険	1991年 3月	里見軍之編『現代思想のトポロジー』、法律文化社
21. 精神という実験（その他）	1992年 6月	今村仁司責任編集『トランスモダンの作法』、リプロポート
22. 西田哲学と知の悲しみ	1993年 1月	『現代思想』第 21 巻第 1 号
23. エスニックな哲学？	1993年 5月	大峯顕他編『地域のロゴス』、世界思想社（編著 2）、pp.269-278
24. ヘーゲルとニヒリズムの課題	1993年 7月	『現代思想』第 21 巻 8 号
25. 解釈のテロス ——意味の解体／再構成	1994年 3月	岩波講座・現代思想 9『テキストと解釈』
26. 倫理学——システム論ののちに	1994年11月	佐藤康邦他編『システムと共同性』、昭和堂（編著 3）、pp.41-64
27. 理性の記憶 ——ヘーゲルにおける＜被りしもの＞の変容	1995年 3月	鍛冶哲郎他編『経験と言葉——その根源性と倫理性を求めて』、大明堂
28. 弁証法の冒険（その他）	1995年 4月	宗像恵他編『西洋哲学史〔近代編〕』、ミネルヴァ書房（編著 4）

29. 理性の発明	1995年6月	『アルケー 1995』（関西哲学会年報 No.3）、pp.151-160
30. 西田哲学と弁証法	1996年2月	大峯顕編『西田哲学を学ぶ人のために』、世界思想社
31. 痛みと身体・痛みと自己	1997年4月	『メンタルケア』第2号、ライプストン社、pp.102-107
32. 否定性と支配——ヘーゲルにおける知識と行為	1997年10月	『西日本哲学年報』第5号、pp.1-13
33. <境界>の制作——30年代思想への接近	1997年12月	『思想』第882号、pp.49-68
34. 講義の七日間——知るということ	1998年1月	（編著5）所収、pp.1-60
35. 信仰は市民生活を越えられるのか	1998年2月	佐藤康邦他編『モラル・アボリア——道徳のディレンマ』、ナカニシヤ出版、pp.213-221
36. 種の論理——田辺元	1998年6月	常俊宗三郎編『日本の哲学を学ぶ人のために』世界思想社、pp.58-88
37. モラルある理性へ	1999年2月	中岡成文他『哲学に何が ^さ できるか』（<岩波新・哲学講義>別巻）pp.3-26
38. 理解と援助のパラドックス	1999年3月	『臨床哲学』創刊号、pp.12-19
39. 排除しない思考は可能か	1999年6月	安彦一恵他編『戦争責任と「われわれ」』、ナカニシヤ出版（編著6）、pp.99-114
40. ケアする欲求、欲求するケア——臨床哲学のために	1999年12月	『メタフュシカ』第30号、大阪大学大学院文学研究科哲学講座、pp.141-153
41. ヘーゲルにおける表出と癒しのエコノミー	2000年3月	科学研究費補助金（平成10年度～11年度）基盤研究（B）(1)（研究代表者・鷺田清一）研究成果報告書『倫理学のアカウンタビリティ』、pp.86-95
42. 環境課題を問う——哲学の視点から	2001年3月	『環境情報科学』30巻1号、pp.43-47
43. 考えにくい死を考える——哲学のまなざし	2001年6月	『生と死の文化史』（懷徳堂ライブラリー4）懷徳堂記念会編、和泉書院、pp.55-85
44. 田辺元——絶対否定は何を差異化するか	2001年7月	藤田正勝編『京都学派の哲学』、昭和堂、pp.52-65
45. いかなる哲学のための、いかなる教育か	2001年7月	『アルケー』（関西哲学会年報）9号、pp.142-151
46. 医療におけるコミュニケーションと「ソクラテス的対話」	2002年3月	『医療・生命と倫理・社会』第1号、大阪大学大学院医学系研究科・医の倫理学教室、pp.14-21
47. 人為與自然——20-30年代的杜威與三木清	2002年8月	卞崇道、藤田正勝、高坂史朗主編『中日共同研究：東亜近代哲学的意義』、沈出版社、pp.151-161（論文48の中国語訳）
48. 人為と自然——1920-30年代におけるジョン・デューイと三木清	2003年2月	藤田正勝、卞崇道、高坂史朗編『東アジアと哲学』、ナカニシヤ出版、pp.86-94
49. <精神の力>としての権利——ヘーゲルの Recht 論に寄せて	2003年3月	『倫理学研究』第33集、関西倫理学会、pp.31-44
50. 看護倫理教育プログラムを考える——ミネソタ大学カリキュラムの検討	2003年3月	『医療・生命と倫理・社会』第2号、大阪大学大学院医学系研究科・医の倫理学教室、pp.165-173
51. 表現と制作——西田幾多郎と三木清のディルタイ批判	2003年11月	『ディルタイ研究』第14号、日本ディルタイ協会、pp.5-18

52. もの・ひと・とき——「臨床と対話」のために	2003年12月	中岡成文責任編集『臨床と対話——マネジできないもののマネジメント』、大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科 2002・2003 年度報告書第 7 巻、pp.10-22
53. SD は社会的・政治的イシューに適用できるか——ウィーンの異種移植 SD に参加して	2004年 3 月	平成 14・15 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）(2)）（研究代表者・中岡成文）研究成果報告書『公共的対話を深めるための哲学的方法論——ソクラテイク・ダイアローグを中心として』、pp.7-14
54. 講義の七日間——生命に肉薄する言葉	2004年 7 月	（編著 7）所収、pp.1-63
55. Logika vrste	2005年 1 月	Filozofska Istrazivanja96（God.25 Sv.1）Zagreb 2005, pp.41-53（論文 36 のクロアチア語抄訳）
56. 1930 年代の科学論——京都学派とバシュラルを中心に	2005年 3 月	平成 14～16 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）(2)）（研究代表者・溝口宏平）研究成果報告書『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』、pp.52-62
57. 痴呆と家族	2005年 3 月	平成 16 年度京都市高齢者介護等調査研究事業報告書、京都市社会福祉法人社会福祉協議会・京都市長寿すこやかセンター発行、pp.22-26
58. 何をいかにアドヴォケートするか——臨床哲学の試み	2005年 3 月	『臨床哲学の可能性』（研究代表者／野家啓一、高等研報告書 0207）、（財）国際高等研究所、pp.25-43
59. 臨床哲学とケア	2005年 8 月	川本隆史編『ケアの社会倫理学——医療・看護・介護・教育をつなぐ』第 6 章、有斐閣選書、pp.181-200（堀江剛と共著）
60. 科学論から 1930 年代を見る——下村寅太郎の思想を中心に	2005年 9 月	『日本思想史学』第 37 号、pp.20-28
61. 理解と援助のむずかしさ	2005年11月	メンタルケア協会編『メンタルケア論 2』、慶應義塾大学出版会、pp.201-214
62. 〈迎え入れ〉、承認、対話	2006年 3 月	平成 15～17 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））（研究代表者・鷺田清一、紀平知樹）研究成果中間報告書『擬似法的な倫理からプロセスの倫理へ——「生命倫理」の臨床哲学的変換の試み』、pp.97-109
63. 現場力の学問化に向けて	2007年 1 月	『臨床と対話』（大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書 2004-2006 文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科・コミュニケーションデザイン・センター第 8 巻）、pp.13-26
64. 哲学的説明——規定と限定	2007年 1 月	『岐路に立つ人文学』（大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書 2004-2006 文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科・コミュニケーションデザイン・センター第 1 巻）、pp.183-194
65. 「対話」は対立を乗り越えられるか（1）——ウィーンの異種移植 SD に参加して	2007年 3 月	『コミュニケーションと現代社会』平成 16 年度～平成 18 年度広域文化形態論講座共同研究報告書（研究代表者・広域文化形態論講座教授・中岡成文）、pp.135-142

66. 「対話」は対立を乗り越えられるか (2) ——公共的イシューへのSD適用	2007年3月	『コミュニケーションと現代社会』平成16年度～平成18年度広域文化形態論講座共同研究報告書(研究代表者・広域文化形態論講座教授・中岡成文)、pp.143-149
67. ヘーゲル承認論における「ひと」と「もの」の媒介関係——イエナ精神哲学を中心に	2007年12月	『メタフシカ』大阪大学大学院文学研究科哲学講座、pp.13-24
68. コミュニケーションと自己変容：序説	2008年3月	平成16～19年度科学研究費補助金(基盤研究(B))『新しい公共的対話モデルの有効性の検討』(研究代表者・中岡成文、課題番号16320005)研究成果報告書、pp.11-42
69. 日本の遺伝子診療の現状と課題 ——「遺伝子診療とその社会文化的側面について のアンケート調査」から	2008年3月	工藤直志、岩淵亜希子、霜田求、西村ユミと共著(第4オナーサー)、『医療・生命と倫理・社会』第7号、pp.13-66
70. 経験批判としての臨床哲学	2008年6月	『岩波講座哲学1』岩波書店、pp.233-251
71. いま、看護倫理教育に求められる視点	2008年9月	『看護展望』第33巻第10号、メヂカルフレンド社、pp.12-18(大北全俊と共著)
72. 展望 知識／情報のインターフェイスへ	2008年10月	『岩波講座哲学4』岩波書店、pp.1-13
73. 弱さの構築——死生の臨床哲学へ	2009年3月	『死生学研究』特集号「日中国際研究会議東アジアの死生学へ」、東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」、pp.178-192
74. 虚弱性的建構(?) ——生死的臨床哲学探討	2009年3月30日	『中日国際学術研討論文集——東亜生死学』、東京大学大学院人文社会系研究科、pp.104-113(論文73の中国語訳)
75. Current Situation and Issues of Genetic Medicine in Japan: From the Questionnaire Survey on Genetic Medicine and its Sociocultural Aspects	2009年5月	Akiko Iwabuchi / Tadashi Kudoh / Motomu Shimoda / Narifumi Nakaoka / Yumi Nishimura, オンライン版、 http://www.ihs.ac.at/steps/gendialog/ergebnis.html
76. What Does Clinical Philosophy Practice?	2010年1月	in: Monthly Review of Philosophy and Culture (哲学與文化)、No.428、輔仁大学編集、哲学與文化月刊雑誌社発行、pp.49-61
77. 区切りをつけること ——臨床哲学をどう語るのか	2010年9月	鷺田清一監修、本間直樹・中岡成文編『ドキュメント臨床哲学』、大阪大学出版会、pp.2-14
78. さまざまな現場への取り組み ——介護、ケアと臨床哲学	2010年9月	同上、pp.32-36
79. 現代社会の組織／運動としての臨床哲学	2010年9月	同上、pp.158-166
80. 知ること／動くこと	2010年9月	同上、pp.167-177
81. 誰の声を聞くか ——医療におけるコミュニケーションデザイン——	2011年2月	『日本語学』第30巻第2号、明治書院、pp.54-63
82. 臨床哲学	2011年5月	戸田山和久・出口康夫編『応用哲学を学ぶ人のために』、世界思想社、第8章「市民と向き合う哲学」所収、pp.274-284
83. Self-transformation and Its Philosophical Support	2011年7月	in: Monthly Review of Philosophy and Culture (哲学與文化)、No.446、輔仁大学編集、哲学與文化月刊雑誌社発行、pp.3-20
84. 自我轉化及哲学支持	2011年7月	曾立芳訳、Monthly Review of Philosophy and Culture (哲学與文化) No.446、輔仁大学編集、哲学與文化月刊雑誌社発行、pp.21-33(論文83の中国語訳)

85. 遺伝子検査の規制枠組みと商業的遺伝子検査の関連：欧州（ドイツ語圏） 2012年 3月 平成 21 ～ 23 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））『「体質遺伝子検査」技術に関する社会ネットワークと社会的認識の調査研究』（研究代表者・山中浩司、課題番号 21330117）研究成果報告書、pp.37-41
86. 体質遺伝子検査についての関係者の見解——認定遺伝カウンセラーの見解 2012年 3月 平成 21 ～ 23 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））『「体質遺伝子検査」技術に関する社会ネットワークと社会的認識の調査研究』（研究代表者・山中浩司、課題番号 21330117）研究成果報告書、pp.106-125
87. 自己変容を援助する思想 2013年 3月30日 財団法人メンタルケア協会編『精神対話論』、慶應義塾大学出版会、pp.381-399
88. Self Technology and Clinical Philosophy: Potentials of Yojo Concepts today 2013年11月 in：余安邦主編、身體、主體性與文化療癒、第四屆國際漢學會議論文集、中央研究院、台北、pp.48-72

【その他の文章】

1. 国際ハイデッガー会議に参加して——拡散と収斂 1985年 7月 『理想』第 626 号（共著）
2. 合理性をめぐるいくつかの問題点 1987年 9月 河上倫逸他編『「ハーバーマス・シンポジウム」法制化とコミュニケーション的行為』、未来社
3. 書評：ハンス＝ゲオルク・ガダマー『科学の時代における理性』 1988年10月 『週刊読書人』第 1756 号
4. ルーマンと意味生成の問題 1991年 2月 河上倫逸編『「ルーマン・シンポジウム」社会システム論と法の歴史と現在』、未来社
5. 書評：大庭健『権力とはどんな力か——続・自己組織システムの倫理学』 1991年 9月 『図書新聞』第 2068 号
6. 書評：Rezension über: Dieter Henrich (ed.), All-Einheit: Wege eines Denkens in Ost und West. 辻村公一編『一即一切——日独哲学コロキウム論文集』 1991年12月 Schopenhauer Studien, Bd.4, Wien
7. ハイデッガーと時代批判の課題——マルクライター他編『ハイデッガー——技術・倫理・政治』を読んで 1993年 2月 大阪大学教養部『研究集録』第 41 輯
8. 拒食症 1993年 9月 川本隆史他編『マイクロ・エシックス——小銭で払う倫理学』、昭和堂
9. 書評：中野敏男『近代法システムと批判——ウェーバーからルーマンを越えて』 1994年 1月 『週刊読書人』第 2018 号
10. 双方向芸術の試み——人間と機械の新たな関係 1994年11月18日 『産経新聞』大阪本社版夕刊
11. 近代西洋哲学史 1995年 2月 AERA Mook6『哲学がわかる』、朝日新聞社アエラ発行室
12. 書評：川本隆史『現代倫理学の冒険——社会理論のネットワークへ』 1995年 3月 『週刊読書人』第 2076 号
13. 書評：W・マルクス『地上に尺度はあるか』 1995年 3月 『週刊エコノミスト』第 3166 号
14. 「弱さゆえの力」という思想——新たな人間の可能性について 1995年 6月 8日 『産経新聞』大阪本社版夕刊
15. 現在（いま）の考察——希望 1995年10月 6日 『産経新聞』大阪本社版夕刊
16. 書評：クリストファー・ノリス『脱構築的転回』 1995年10月 『図書新聞』第 2266 号

17. 現在（いま）の考察——ことば	1995年11月10日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
18. 現在（いま）の考察——自然	1995年12月1日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
19. 現在（いま）の考察——幸福	1995年12月22日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
20. 書評：Rezension über: Ryosuke Ohashi (ed.), Die Philosophie der Kyoto-Schule. Texte und Einführung.	1995年12月	Schopenhauer Studien, Bd.5, Wien
21. 現在（いま）の考察——生命	1996年1月19日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
22. 現在（いま）の考察——自由	1996年2月9日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
23. 現在（いま）の考察——不安	1996年3月1日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
24. インタビュー：大辞林〔第二版〕の「哲学」	1996年3月	三省堂ぶっくれっと 118 号
25. 現在（いま）の考察——国家	1996年3月22日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
26. 現在（いま）の考察——子ども	1996年4月12日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
27. ネットワークというシステム	1996年4月	イミダス特別編集『コンピューターネットワーク』、集英社
28. 現在（いま）の考察——歴史	1996年5月10日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
29. 現在（いま）の考察——ゲーム	1996年5月31日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
30. 現在（いま）の考察——性	1996年6月21日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
31. 現在（いま）の考察——死	1996年7月12日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
32. 現在（いま）の考察——愛	1996年8月2日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
33. 現在（いま）の考察——憂い	1996年8月23日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
34. 現在（いま）の考察——情報	1996年9月13日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
35. 現在（いま）の考察——公共性	1996年10月4日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
36. 現在（いま）の考察——暴力	1996年10月25日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
37. 現在（いま）の考察——信頼	1996年11月15日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
38. 現在（いま）の考察——再生	1996年12月13日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
39. 現在（いま）の考察——癒し	1997年1月10日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
40. 現在（いま）の考察——いきづまり	1997年1月31日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
41. 現在（いま）の考察——コピー	1997年2月21日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
42. 現在（いま）の考察——終末	1997年3月14日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
43. 書評：矢代梓『啓蒙のイロニー』	1997年10月24日	『週刊読書人』第 2207 号
44. 書評：大庭健『自分であるとはどんなことか』	1998年3月6日	『週刊読書人』第 2225 号
45. 「ケアはお互いさま」（臨床テツガク講座 2）	1998年12月	『整形外科看護』第 3 巻第 12 号、pp.58-61、メデイカ出版
46. 公共的価値について語ろう	1999年1月14日	『産経新聞』大阪本社版夕刊
47. 哲学プラクティス（カウンセリング）国際学会に参加して	1999年3月	『臨床哲学』創刊号、pp.79-90
48. 「所有」が終わるところ——臓器移植が突きつける問題（臨床テツガク講座 7）	1999年5月	『整形外科看護』第 4 巻第 5 号、pp.4-7、メデイカ出版
49. 関係づけるケアへ（臨床テツガク講座 14）	1999年12月	『整形外科看護』第 4 巻第 12 号、pp.4-7、メデイカ出版

50. 第5回哲学プラクティス国際学会に参加して	1999年秋	『臨床哲学のメチエ』Vol.4, 大阪大学文学部臨床哲学・倫理学研究室、pp.4-7
51. 21世紀のナースへ	2000年1月	『エキスパートナース』Vol.1, No.1, p.12
52. 共感のうらがわ——ある討論をもとに	2000年3月	『臨床哲学』第2号、pp.90-97
53. 福祉のための臨床哲学	2000年5月	『月刊福祉』第83巻第7号、全国社会福祉協議会、pp.24-27
54. 自分を中心であること	2000年11月	『整形外科看護』第5巻第11号、pp.78-79
55. 「情報社会と倫理」を倫理学の立場で担当して	2002年9月	『サイバーメディア・フォーラム』第3号、大阪大学サイバーメディアセンター
56. 書評：小松美彦『対論 人は死んではならない』	2003年1月31日	『週刊読書人』第2472号
57. 提起「法というアリーナ」	2003年12月25日	大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」2002・2003年度報告書、第1巻「岐路に立つ人文科学」（責任編集 鷲田清一）pp.159-163
58. 告白する仮面	2004年3月10日	『Interface Humanities』（大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」ニューズレター）第3号、pp.16-17
59. 臨床哲学の課題と実践	2004年5月	『日本哲学会第63回大会予稿集』、pp.70-72
60. 「倫理なんて」という前に	2004年8月	『図書』第664号、pp.12-15
61. 大学における科学技術コミュニケーション教育	2005年4月	『Science & Technology Journal』第14巻第4号、科学技術広報財団、pp.22-23
62. コミュニケーションをデザインするとは	2005年7月	『生産と技術』第57巻第3号、pp.63-64
63. 医療倫理コンサルテーションのあり方について——宮崎市「喫茶☆りんり」、「かふえ☆りんり」訪問記	2006年3月	『臨床哲学』第7号、pp.105-110
64. 倫理（学）的实践の新展開——「コミュニケーションデザイン」をめぐる	2006年4月	『倫理学研究』第36号、関西倫理学会編、pp.143-148
65. 解題：『高山岩男著作集』第二巻（『ヘーゲル』『弁証法入門』『弁証法の歴史』）	2007年11月	高山岩男『哲学的人間学 ヘーゲル』（高山岩男著作集第二巻）、玉川大学出版部、pp.712-725
66. 解題：『フロイト全集』第8巻（「機知——その無意識との関係」）	2008年2月28日	中岡成文責任編集、中岡成文他訳、岩波書店、pp.315-329
67. 彩都サイエンスカフェをファシリテートして	2008年3月	平成16～19年度科学研究費補助金（基盤研究（B））『新しい公共的対話モデルの有効性の検討』（研究代表者・中岡成文、課題番号16320005）研究成果報告書、pp.153-157
68. 倫理観と担当科目	2009年2月28日	『創造と実践』第8号、大阪大学大学教育実践センター、pp.28-29
69. 時間をつかむ	2009年7月15日	『よろしおすなあ修徳』第5号、総合福祉施設・修徳、p.7
70. 歌とリズムと思想	2009年8月20日	I.I.MECA、Vol.54、財団法人メンタルケア協会発行、pp.1-3
71. ここにいて、山形さんを思う	2011年1月13日	『理解と独創の人 山形頼洋の思い出』、「理解と独創の人 山形頼洋の思い出」編集委員会発行、pp.203-205
72. 書評：小川仁志『日本を再生！ 近所の公共哲学』	2011年8月22日	『公明新聞』読書欄

73. 「元気の出る倫理」について 2013年2月1日 「医療と哲学」第39回、THE LUNG perspectives、Vol.21. No.1、メディカルレビュー社、pp.100-102

* 翻訳、事典類執筆は省略する。

【研究発表・講演など】

1. 研究報告ドイツ語：差異の問いへ——田辺元の絶対無の哲学 (Zur Differenzfrage. H.Tanabes Philosophie des Absoluten Nichts) 1984年5月10日 第1回国際ハイデッガー会議、アウクスブルク大学
2. 講演ドイツ語：非同一的なものと無——東洋と西洋における否定性思考の諸相 (Das Nichtidentische und das Nichts. Aspekte des Negativitätsdenkens in Ost und West) 1984年12月10日 ウィーン大学哲学部
3. 講演ドイツ語：理解と援助のパラドックス (Das Paradox des Verstehens und des Helfens) 1998年8月5日 第4回国際哲学プラクティス協会大会、トマス・モールス・アカデミー (ドイツ、ベルギッシュ・グラートバッハ)
4. 研究報告英語：日本の大学生はソクラテス志向的対話から何を学ぶか (What do Japanese students learn from Socratic-oriented dialogs?) 2002年7月30日 第4回ソクラテックダイアログ国際会議 (Ethics and Socratic Dialogue in Civic Society: Forth International Conference)、バーミンガム大学ニューマン・カレッジ
5. 講演：人為と自然——1920～30年代におけるジョン・デューイと三木清 2000年8月29日 日中学術フォーラム「近代日本哲学の東洋的意義」(中国社会科学院東方文化研究中心、北京)
6. いかなる哲学のための、いかなる教育か 2000年10月8日 関西哲学会シンポジウム
7. 臨床哲学入門——ケアとコミュニケーション 2000年10月10日 川崎医療福祉大学特別講義
8. 緩和ケアと癒しの臨床哲学 2000年10月12日 近畿ホスピス・在宅ケア研究会
9. 臨床哲学について 2000年12月9日 国際高等研究所公開セミナー
10. ケアの哲学 2000年12月22日 日本赤十字看護大学哲学研究会
11. 講演：Klinische Philosophie und SD in Japan (臨床哲学と日本のSD) 2001年2月25日 ソクラテック哲学協会 (於：ドイツ・ヴュルツブルク)
12. 社会哲学について 2001年6月24日 京都学生センター (加茂科研)
13. 臨床的理性批判について 2001年12月1日 国際高等研究所
14. 臨床哲学とは何か 2001年12月14日 大谷大学文学部特別講義
15. (医系) 倫理委員会の社会的役割 2001年12月23日 京都大学文学部第一会議室 (加茂科研)
16. 医学・医療と倫理委員会 2002年3月18日 医療・技術・社会研究会 (上智大学)
17. 三木清とデューイ 2002年3月30日 日本哲学史フォーラム (京都大学)
18. 表現と制作——西田幾多郎と三木清 2002年7月6日 日本デイルタイ協会関西研究会講演 (京都大学)
19. <精神の力>としての権利——ヘーゲルの Recht 論に寄せて 2002年11月17日 関西倫理学会大会シンポジウム「権利」(愛媛大学)
20. 提起：法というアリーナ 2003年9月23日 大阪大学 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」ワークショップ「現場という領域、情報という領域」(千里阪急ホテル) 提起5「法というアリーナ」[コーディネーターとしての提起]
21. 第一会場総括コメント 2003年10月12日 日本倫理学会第54回大会共通課題「ニヒリズム」(静岡大学)

22. 生命倫理と看護	2003年12月14日	日本赤十字看護大学特別講義
23. 〈在宅における医療行為〉をめぐる対話の試み	2004年1月24日	堀江剛と共同発表、学術振興会、人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業、プロジェクト研究〈医療システムと倫理〉主催（プロジェクト・リーダー 清水哲郎）、研究集会《医療の向上を目指して》（仙台市）
24. 臨床哲学の実践と課題	2004年5月23日	日本哲学会第63回大会ワークショップ「哲学教育を考える」（南山大学）
25. 科学論から1930年代を見る ——下村寅太郎の思想を中心に	2004年10月30日	日本思想史学会2004年度大会シンポジウム「思想史における1930年代——京都学派の位置」（京都大学）
26. 臨床哲学とコミュニケーションデザイン	2005年10月9日	日本倫理学会第56回大会共通課題「倫理学の現実（リアリティ）」（岡山大学）
27. 臨床哲学からコミュニケーションデザインへ	2005年10月31日	広島大学大学院文学研究科講演会「人文学の社会連携を考えるⅡ」（広島大学中央図書館ライブラリーホール）
28. 対話を促進するということ——大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの試み	2005年12月10日	第4回対話シンポジウム in 愛媛（ホテル奥道後）、基調講演
29. 英語講演 (Seminaro avanzato): Invention of Boundaries——Kyoto-School Philosophers Confronting Western Modernity	2006年2月22日	ボローニャ大学言語学・東洋学科
30. 自己変容の意味と可能性 ——境界線はいかにして浸透可能か	2006年7月2日	MCM（医療コンフリクトマネジメント）研究会、於：早稲田大学大学院法務研究科
31. 自己変容はいかに可能か ——第5回対話シンポジウムの開催にあたって	2006年11月3日	第5回対話シンポジウム：地域からの対話促進の発信——対話の多様性と可能性、於：大阪大学銀杏会館
32. 公開研究授業：コミュニケーション（対話）的理性の可能性——ケアの場面から	2006年11月17日	大阪府立佐野工業高等学校（第3学年選択科目「現代の諸課題」テキストイル工学科クラス）
33. 「安楽」のすすめ ——この社会で「自分」を生きるために	2006年12月5日	摂南大学外国語学部講演会（摂南大学外国語学部）
34. コミュニケーションデザインの観点からのコメント	2007年3月24日	大阪ホスビス・在宅ケア研究会2007年度フォーラム「もう一度考える自己決定」（大阪大学中之島センター）
35. ひととはなぜ学ぶのか	2007年5月6日	藍野大学新入生用レクチャー（藍野大学）
36. 特別講演：倫理について	2008年2月2日	国立循環器病センター看護学会（国立循環器病センター・図書館講堂）
37. 研究発表：弱さの構築——死生の臨床哲学へ	2008年2月18日	「東アジアの死生学」日中会議、主催：東京大学グローバルCOE「死生学の展開と組織化」+中華日本哲学会（北京市東城区・起家楼飯店多功能会議庁）
38. 看護倫理と看護師の社会的責任	2008年8月4日	関西労災病院看護部全体研修（関西労災病院）
39. 対話の時代と哲学の課題	2008年10月6日	大阪大学中之島講座（大阪大学中之島センター）
40. レクチャー：コミュニケーションデザインとは	2009年3月15日	NPO法人関西ウェルビーイングクラブ（KWC）研修会「予防歯科のためのコミュニケーションデザインをつくる」（大阪府産業創造館）（Well-Being NEWS 第294号（2009年6月号）、NPO法人ウェルビーイング発行、pp.4-5 に要旨が所収）

41. 臨床における医療倫理を考える	2009年5月28日	西宮市立中央病院倫理委員会研修会 (西宮市立中央病院3階講義室)
42. 提題：双方向的な倫理と倫理教育を求めて	2009年7月24日	日本医学教育学会第41回大会シンポジウム 「臨床倫理教育」(大阪国際交流センター)
43. 講演：ケアの倫理／理論について	2009年9月1日	愛知医科大学看護学部看護教育セミナー (愛知医科大学看護学部)
44. 講演：元気の出る倫理に向けて	2009年9月9日	大阪南学術セミナー (大阪南医療センター)
45. 招待講演：Listen, Wait, and Move in Therapeutic Activities	2009年9月19日	The 1 st International Conference on Humanities Therapy, Gangwon University(江原国立大学)、 春川市(韓国)。講演原稿は、 http://www.ht21c.org/page/page.php/10
46. 特定質問：先人に死生を問う	2009年10月18日	日本倫理学会第60回大会共通課題「死生観」 (南山大学・名古屋キャンパス)
47. 開会講演：On Philosophical Therapy and Clinical Philosophy: Opening Speech to the Clinical Philosophy International Workshop	2010年2月18日	Clinical Philosophy International Workshop、臨床 哲学国際ワークショップ「哲学治療学と臨床哲学」、待兼山会館(大阪大学)
48. 英語講演：Kyoto-School Philosophers Confronting Western Modernity	2010年4月26日	グローニンゲン大学学生訪問団へのレクチャー (大阪大学教育実践センター)
49. 招待講演：Philosophy for Citizens? ——A Reconsideration of Socratic Philosophizing	2010年11月10日	台湾政治大学
50. 招待講演：Self-transformation and its Philosophical Support	2010年11月11日	慈済大学(台湾・花蓮市)
51. 招待講演：Clinical Philosophy as Critique of Experience	2010年11月13日	台湾・中央研究院
52. 招待講演：Self-transformation and its Philosophical Support	2010年11月14日	哲学諮商と人文学療育研究会、輔仁カトリック 大学・天主教学術研究院主催
53. 提題：よいパフォーマンスのための「持続可能な倫理」	2012年2月18日	第5回臨床倫理事例研究会シンポジウム (大阪大学コンベンションセンター)
54. 英語講演：Toward an empowering ethics in healthcare and research	2012年2月29日	熊本大学グローバル COE リエゾンラボ研究会 (熊本大学発生活医学研究所カンファレンス室)
55. 特別講演：養生論と自己へのケア ——貝原益軒『養生訓』を中心に	2012年6月4日	大阪大学大学院医学系研究科公衆衛生教室
56. 講演：くらしの中の哲学 ——京都学派のサロンと散歩道	2012年6月12日	2012年度立命館大阪ブロムナードセミナー、大阪・京都文化講座(立命館大阪キャンパス)
57. 招待講演：Self Technology and Clinical Philosophy ——Potentials of <i>yojo</i> concepts today	2012年6月22日	第4回漢学国際会議(台湾・中央研究院)
58. 招待講演：ケアとは誰の何をケアするのか	2013年12月1日	保健医療学会第4回学術集会(藍野大学)
59. 提題：＜生ある者＞の相互性へ——ケアと科学	2014年3月1日	日本学術会議・看護学分科会主催公開シン ポジウム「ケアサイエンスの必要性和看護学 の役割」(日本学術会議講堂)
60. 研究発表：大阪大学の〈医学概論〉 ——澤瀉久敬の場合	2014年3月4日	医療人文学研究会

【新聞記事、対談、ワークショップなど】

- | | | |
|--------------------------------|----------|-------------------------|
| 1. インタビュー記事：問題を共有した「対話」が突破口になる | 2004年10月 | Monthly ミクス第32巻12号、p.43 |
|--------------------------------|----------|-------------------------|

- | | | |
|--|-------------|---|
| 2. 対談：不安をかたどる（春日匠、三谷研爾と共に） | 2005年2月28日 | 『Interface Humanities』（大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」ニューズレター）第 5 号、pp.3-5, 8-11 |
| 3. 平成 16 年度京都市高齢者介護等調査研究事業・公開講座「痴呆ケアと家族」パネルディスカッション、コーディネーター | 2005年3月19日 | ひと・まち交流館 京都 大会議室、主催：京都市、社会福祉法人京都市社会福祉協議会、京都市長寿すこやかセンター |
| 4. 第 9 回関西科学技術セミナー、テーマ別講演司会 | 2005年11月8日 | 主催：関西科学技術セミナー企画会議（大阪大学コンベンションセンター） |
| 5. 第 3 回大阪大学医療人文学研究会、オーガナイザー | 2008年4月23日 | 大阪大学待兼山会館 |
| 6. 対談：きく・はなす・対話する・共にいる（西川勝と共に） | 2008年11月15日 | 「臨床コミュニケーション入門」第 4 回（大阪 YMCA） |
| 7. 第 5 回大阪大学医療人文学研究会、特定質問者 | 2009年1月29日 | 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター |
| 8. ワークショップ「臨床哲学はいかなる実践か」オーガナイザー | 2009年4月26日 | 応用哲学会（京都大学文学部） |
| 9. GCOE 国際シンポジウム「コンフリクトを軽減する対話と実践——人文治療学の挑戦」
Global COE Program International Symposium: "Dialogue and Practice Reducing Conflicts: Challenge of Humanities Therapy"、司会 | 2010年2月17日 | 待兼山会館（大阪大学） |
| 10. 対談：養生訓から学ぶ（西川勝と共に） | 2012年9月12日 | シリーズとつとつ一般公開講座「貝原益軒の『養生訓』から学ぶ」第 5 回（特別養護老人ホーム・グレイスヴィルまいづる、舞鶴市） |
| 11. ひとことインタビュー：対話のなかから“倫理”が生まれます。 | 2012年10月15日 | COML, No.266, ささえあい医療人権センター COML 発行 |